

「日中平和友好条約締結に至る新事実

—三木首相の周総理宛て親書、密使外交明るみに—

川村範行（名古屋外国語大学特任教授、中日新聞元論説委員）

1972年の国交正常化から6年後の1978年に締結された日中平和友好条約は、福田赳夫内閣の成果とされる。しかし、田中角栄退陣後に首相となった三木武夫氏が就任直後に条約早期締結に向けて周恩来総理宛て親書を親しい民間人に密かに託していたという新事実が明らかになった。条約締結から40周年目に、この“密使”へのインタビューから詳細な証言が得られた。

また、三木首相は就任当初、条約早期締結に向けて密使外交のほかにも外務省や駐中国大使に対し、矢継ぎ早に指示を出していたことが、三木氏の母校、明治大学史資料センターの関連文書の調査から裏付けられた。三木氏は条約早期締結に強い意欲と使命感を持ち、密使ルートと外交ルートの両面から条約早期締結に向けて取り組んでいたと判断することができる。

三木首相から親書を託されたのは、国交正常化以前に北京に居住し、周総理から“民間大使”と呼ばれた西園寺公一氏の秘書役で、周総理の腹心の廖承志中日友好協会会長と家族ぐるみ昵懇だった**南村志郎氏**である。南村氏は北京を拠点に両国を行ったり来たりして、60年余り日中友好交流活動に取り組み、両国に幅広い人脈を持つ。三木氏の外交ブレーン平沢和重氏（NHK解説委員）と西園寺公一氏が友人関係にあったことから、平沢氏を介して南村氏と三木氏が知り合い、「中国関係は南村と相談しろ」ということになったという。今年3月から5月にかけて、南村氏は延べ11時間のインタビューに応じ、三木氏との関係で三つの新事実を証言した。

(1) 72年4月、自民党顧問三木武夫氏と周総理の会見をお膳立てしたのが南村氏だった。三木氏から「周総理に会いたい」との電話を受けて、廖承志氏に連絡し、「いつでもいいよ」との返事をもらう。4月17日、21日の2回、周総理との会見が実現。周総理の要請で会談内容は一切秘密となったが、北京市内の別のホテルに宿泊した南村氏は三木氏から話を聞いた。周総理が、佐藤栄作内閣の次の政権について質し、三木氏は「三木派と中曽根派が田中角栄氏を支持する」と明言した。

帰国直後の4月24日付け三木氏自筆メモ（明治大学史資料センター蔵）にはこうある。「国交回復の前提は『日華平和条約』では日中間の戦争状態は終了していないという現実認識から出発する」「早期に国交回復をやり得るとの確信。一層実現に挺身の決意」。三木氏は帰国以降、国交正常化と平和友好条約締結の必要性を強く主張し、自民

党内で国交正常化への動きに影響を及ぼし、田中政権の誕生へとつながる。

(2) 国交正常化翌年の73年4月、大型訪日団の廖承志団長と三木武夫副総裁との会食を取り持ったのが南村氏だった。①三木副総理が廖団長を訪問②廖団長も三木副総理を訪問③廖団長と三木武夫副総理の会食懇親(73年4月21日)。「日中平和友好条約は絶対に私がやってみせます」と、三木氏が平和友好条約締結への強い意欲を表明したのを、陪席した南村氏が聞き取る。

(3) 1974年12月、三木首相が就任3、4日後、南村氏を「深夜12時に」と指定して私邸に呼び、周総理宛て親書を手渡す。「日中平和友好条約の締結について周総理の協力を得たい」と南村氏に打ち明けた。翌日、南村氏は北京へ飛び、廖承志氏に親書を手渡す。北京で1週間後に廖氏から返書を受け取る。しかし、廖氏は「三木氏では条約締結はできない」と南村氏に告げる。帰国後、返書を三木事務所所長竹内潔氏に届ける。三木首相が周総理とのトップ交渉で早期条約締結にかけた強い姿勢の表れだ。

三木首相は密使外交の翌年75年1月24日、施政方針演説で、「日中平和友好条約を締結し、子々孫々にわたる日中永遠の友好関係の基礎を固める年にしたい」と表明。小川平四郎駐中国大使宛てメモ(同センター蔵)には、「同年(74年)12月に三木内閣は早期締結の指示を行い、具体的な運びについては外務省当局に一任された。今回、三木総理は交渉のこう着状態打開のために直接内容的指示を行った」「小川大使は最善の努力をすべきで、交渉中断等ありうべきことではない」と、大使にも条約締結へ不退転の努力を訴えている。

小川大使が75年3月から中国外交部と会談を重ねるが、「反覇権条項」について条約の前段と後段の二か所に書き込むべきだとする中国側に対し、日本側は前文にのみへの記入を主張。中国側との考え方の溝は埋まらず、75年5月、予備交渉は12回目で途絶える。

結局、三木内閣では条約締結ならず。その要因は①閣僚・党役員に親台湾派、親ソ派が多く、足を引っ張られた。②日中・日ソ両外交の狭間で立ち往生した。③76年2月、ロッキード事件で田中前首相を逮捕し、党内の三木おろしにつながり、求心力を失った。④中国は66年からの文化大革命により国内が混乱、共産党内の権力闘争が激化し、外交をリードした毛沢東主席と周恩来総理が病床につき、76年に相次ぎ死去。弱体な三木政権を信用ある交渉相手とみなさなかった。

結論は以下の通り。①三木首相は就任直後に周総理宛て密使外交を行い、トップ交渉で一気に条約早期締結に持っていかうとした積極姿勢が、南村証言からリアルに裏付けられる。②三木首相の国交回復及び条約締結にかける強い使命感と信念は、国交正常化以前に周総理と単独会見したことで確たるものとなり、さらに正常化翌年に訪日した廖承志団長との会食の席でも決意を表明していたことが、南村証言や直筆メモなどから裏付けられる。③三木首相は、南村ルートとともに正規の外交ルートにより条約早期締結を実現すべく、在中国大使にも直接指示し、また、反覇権条項でも妥協案を出して、必死に取り組もうとしていたことが、母校明治大学史資料センター蔵の外務省公電や直筆メモなどから、より明確に裏付けられた。“アヒルの水かきのようなだった”と言える。④周総理は当初、三木氏を親中派とみて厚遇したが、首相就任以降は条約締結への非力さを見抜き、またソ連牽制の方針からも反覇権条項で三木内閣に強硬に対応した経緯が、南村証言及び関係史料から、より明確に裏付けられた。

今後の研究課題は、(1)南村証言の裏付けとして、親書、返書(いずれか写し)の存在が確認できないか。当時の南村氏と密接な人たちは鬼籍入りしたが、外務省、大使館、中日友好協会などの関係者の証言を一人でも得たい。(2)廖承志氏が「三木ではだめだ」と言った根拠・理由は何か。条約早期締結に前のめりだった三木首相に対し中国側はどこまで締結に乗り気だったかについての検証が必要である。

付記 南村氏のロングインタビューと解説をまとめた本『日中外交の黒衣 三木親書を託された民間人の回想録』(A5判、112頁、定価1,400円)が10月上旬に名古屋の出版社ゆいぽおとから出版された。